

〔随筆〕

第二次世界大戦の「記憶」を辿る旅： フィンランドの冬戦争博物館編

石野裕子

国士館大学の学外研究派遣員として、2024年4月から1年間フィンランドで研究することが決まった時、最初に思いついた「野望」が研究対象地にできるだけ足を運びたいということであった。もちろん、一次史料を読んだり、語学のブラッシュアップをしたり、現地の研究者と交流したりという計画も立てていたが、普段の短期出張では足を運びにくい地域まで調査に行きたいという思いがあった。

在外研究テーマは「現代フィンランドにおける第二次世界大戦の『記憶』と社会の変容」である。第二次世界大戦中、フィンランドは2度ソ連と戦い、敗北した。フィンランドで1度目の対ソ戦争は「冬戦争（Talvisota, Vinterkriget: 1939.11.30-1940.3.13）」^{*1}、2度目は「継続戦争（Jatkosota, Fortsättningskriget: 1941.6.25-1944.9.19）」と呼ばれる^{*2}。

今回は北の都市クフモにある冬戦争博物館を中心に、両戦争の戦跡や他の博物館を巡る計画を立てたが、予想通り車がないとアクセスし辛い場所ばかりであった。このような事態を予想してフィンランド渡航前に国際運転免許を取得していたが、筆者は年に数回レンタカーを運転するだけのドライバーにすぎず、かつ左ハンドルの車の運転は未経験であった。しかし、調査のために車の運転はやむを得ないと覚悟を決めたところ、危ないと判断されたのか、友人でもあり、2019年5月に客員研究員として国士館大学に在籍したことがある研究者カティ・ミッコラ（Kati Mikkola）と彼女のパートナーで研究者でもあるリスト・ブロムステル（Risto Blomster）が家族旅行を兼ねた形で私の調査に付き合ってくれた。2人の

*1 フィンランドではその歴史的背景からフィンランド語とスウェーデン語が公用語である。本稿での原語表記はフィンランド語、スウェーデン語の順番で表記する。

*2 冬戦争から「継続」した戦争という意味で、継続戦争と呼ばれているが、その継続性には色々議論がなされている。詳細は、拙稿「第4章「フィンランドにおける対ソ戦争認識の変遷と現状—ウクライナ侵攻との関連で—」歴史学研究会編『ロシア・ウクライナ戦争と歴史学』大月書店、2024年、96-121ページを参照。なお、継続戦争後、フィンランドはドイツとラップランド戦争（Lapin sota, Lapplandskriget 1944. 9. 15-1945. 4. 27）も戦っている。

10歳になる双子の娘エステル（Esteri）とアリス（Alice）も一緒である^{*3}。家族旅行を兼ねていたものの、本気で筆者の調査に付き合ってくれた。戦争博物館、戦跡、そして墓地を巡る家族旅行になってしまい、双子には申し訳なかったが、カティによるといつも家族旅行で博物館や美術館に行っているの子どもたちは慣れているとのことであった。実際に、双子は大人たちが真剣に博物館の説明を読んだり、戦跡を眺めている間、キッズスペースで絵を描いたり、勝手に二人で遊んでいたりでしていた。ちなみに在外研究へ出発直前に高性能の携帯電話を購入した筆者は、助手席で携帯電話によるナビ係と双子のリクエストによるラジオの音楽切り替え係をずっと担当した（おかげで2024年夏のフィンランド・ヒットソングに詳しくなった）。

本稿はそのような調査旅行で訪問した博物館、戦跡、記念碑のうち、2つの冬戦争博物館、1つの冬戦争に関連した野外展示およびそれらに関連する記念碑の特徴を記すことで、上記の研究課題、すなわち現代フィンランドにおける第二次世界大戦の「記憶」の整理をすることが目的である。

1 フィンランドにとっての冬戦争

はじめに、調査対象である冬戦争について概説したい。上述したように冬戦争は第二次世界大戦中の1939年11月末に勃発した第一次ソ連・フィンランド戦争のことで、冬戦争という呼称はフィンランド側のものである。

1939年9月1日にナチス・ドイツがポーランドに侵攻すると、ソ連も同月17日にポーランドに侵攻、その翌月の10月、ソ連がフィンランドに対して相互援助条約締結の交渉を求めてきたため、フィンランド政府は代表団をモスクワに送り込み、交渉を行った^{*4}。その過程でソ連から領土交換の提案がなされたが、フィンランド側は最終的に11月にソ連の要求を完全に拒否した。交渉決裂後、ソ連側はフィンランド軍の発砲事件を根拠に11月30日にフィンランド領を空爆し、戦争が始まった。アイモ・カヤンデルが率いる内閣は戦争勃発後すぐに総辞職し、リスト・リュティが首相に就任、戦争終結を模索したが、ソ連側はロシア・カレリア地方にフィンランド共産主義者のオットー・V. クーシネンを首班とした傀儡政権を樹立し、フィンランドの正式な政府とした。それゆえ、フィンランド側の交渉に応じなかった。

*3 この旅行で訪問した英雄墓地（戦没者墓地）の調査報告に関しては、「第二次世界大戦の『記憶』を辿る旅：フィンランドの英雄墓地編」『国土館大学教養論集』第88号、2025年2月に掲載予定である。

*4 ソ連は、フィンランドとの交渉の前後にバルト三国と相互援助条約の締結を行っていた。詳細は拙著『物語フィンランドの歴史—北欧先進国「バルト海の乙女の800年」中公新書、2017年、146-152ページを参照。

フィンランド軍は善戦したものの、1940年3月に休戦、フィンランドは領土の10分の1を割譲しなければならないなど厳しい講和条件を呑まざるをなかった^{*5}。

以上のように冬戦争はフィンランドがソ連に敗北した戦争である。しかし同時に、ある種の「栄光的過去」を現在に至るまでフィンランドに伝える戦争でもある。フィンランド軍が巨大な敵であるソ連軍に対して善戦し、独立を守ったのが大きな理由である。実際、当初45万もの圧倒的な数と軍備を有するソ連軍に対して、28万と劣勢であったフィンランド軍は一丸となって国土を防衛し、いくつかの局地戦では勝利した。また、この戦争は、フィンランドは独立後の1918年1月に勃発した内戦の辛い過去を乗り越え、分断されたフィンランド社会を修復する作用をもたらしたとみなされた^{*6}。

冬戦争でのフィンランド軍の奮闘ぶりは「冬戦争の驚異」「冬戦争の精神」などと表現され、プロパガンダ的な役割を果たしてきた^{*7}。また、戦争は105日間戦われたことから「105日」と言えば、冬戦争を意味することになった^{*8}。後述するように、105という数字は冬戦争の記念碑のモチーフ等に用いられるようになる。

以上のような歴史背景を有する冬戦争は、専門の博物館でどのように表象されているのだろうか。そのような問いを抱いて冬戦争博物館を訪問した。

2 冬戦争博物館

筆者が把握する限り、フィンランドで「冬戦争博物館」という呼称そのものをつけた博物館は2館のみである^{*9}。1つ目が北の街クフモ郊外にある「冬戦争博物館（Talvisotamuseo, Vinterkrigsmuseum）」、2つ目がクフモからさらに北に100キロほど上ったスオムツサルミにある「冬戦争博物館ラーテン・ポルッティ

*5 同上、152-161ページを参照。

*6 冬戦争の位置付けに関しては、ロシア史研究会2023年度大会〈共通論題A〉「ロシア・ソ連の対外戦争と政治・外交」報告ペーパーおよび発表「フィンランドにおける冬戦争の位置付け：継続戦争との比較を中心に」で論じたが、まだ研究が不十分なので論文化していない。今後の課題である。

*7 Timo Soikkanen, “Talvisodan henki”, Jari Leskinen ja Antti Juutilainen toim., *Talvisodan pikkujättiläinen*, Porvoo: WSOY, 1999, s. 235. なお、「冬戦争の精神」に関する詳細な分析は、Sampo Ahto, *Talvisodan henki: mielialoja Suomessa talvella 1939-1940*, Helsinki: WSOY, 1989, Tuomas Tepora, *Sodan henki, Kaunis ja ruma talvisota*, Helsinki: WSOY, 2015 を参照。

*8 「栄光の105日」という表現もある。高校の歴史教科書でも「105日」という表現が使用されているように非常に一般的な用語となっている。

*9 「サキュラ・冬戦争・継続戦争博物館」という名称の博物館は南西フィンランドのサキュラにある。なお、「継続戦争博物館」という名がついた博物館は、管見の限り見つからなかった。

(Talvisotamuseo Raatteen portti, Raatteen Portti Winterkriegsmuseum)」である^{*10}。今回の調査では両方の博物館を訪問し、類似点と相違点を確認した。

2-1 クフモの冬戦争博物館

1994年、クフモに開館した同博物館は、車でないと極めてアクセスしにくい場所に位置する。同博物館の展示はその名称通り、冬戦争に特化した内容であり、特に博物館のあるクフモ地域の状況に関する展示が多くを占めていた。

同博物館では戦争の勃発による住民およびクフモの様子、フィンランド人兵士の奮闘、兵士の日常、野戦病院、戦争終結後のクフモの状況が時系列順に展示されていた。表記言語はフィンランド語と英語が主であったが、展示内容によってはスウェーデン語、ドイツ語、ロシア語でも説明されていた。



写真1 冬戦争博物館の入り口の多言語表記
2024年7月5日 筆者撮影（以下同様）



写真2 冬戦争博物館入り口

（1）戦争勃発による住民、クフモ地域の様子

同博物館では、はじめにソ連製のフィンランドの地図が貼ってあり、その上に「冬戦争が1939年11月30日に勃発した」と書かれている展示から始まる。次に戦争勃発によって、ソ連（ロシア）の国境から20~30キロほどの位置にあるクフモの住民が国内の西側地域^{*11}に避難する様子の展示が続く。

*10 場所は附属地図を参照。

*11 展示の説明によると、アラヴィエスカ、ユリヴィエスカなど主に7箇所に分散して避難した。

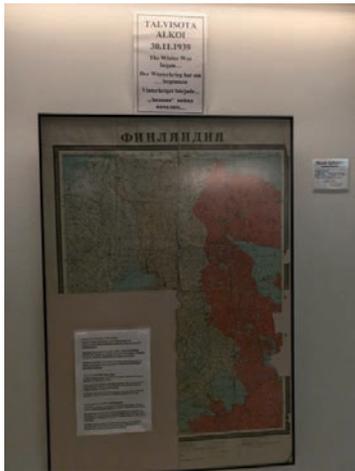


写真3
冬戦争勃発時のソ連側の地図

避難の様子は、ソリで家財道具を積めるだけ積んで避難する人びとの移動のマネキンによって表現され、実際の避難の様子を映した写真も多く展示されていた。避難の最中に、子どもと高齢者、合わせて127名が命を落としたとも説明されており、突如始まった戦争によって人びとが困難な状況に置かれた様子が窺える。

また、クフモは245機のソ連の飛行機によって、合計48回空爆されたと説明されており、爆弾の破片や模型、空爆による火事を消火する消防士たちのマネキンが展示されていた。



写真4
消火活動をする様子を表現したマネキン展示



写真5 爆弾の破片の展示と兵士のマネキン

（2）フィンランド人兵士の奮闘、兵士の日常

次の展示は実際にフィンランド人兵士が、数の上でも軍備の上でも自分たちより遥かに上回っているロシア人兵に対して勇敢に戦った様子が写真や軍装品の展示、マネキンで説明されていた。特にモッティ（Motti）戦闘と呼ばれるフィンランド軍の包囲作戦については、地図とともに説明がなされていた。説明によると、モッティとは「四方から包囲された敵集団、あるいはその包囲されている地域」を意味する。フィンランド軍は戦闘場となった森林地帯で、ソ連軍を「モッティ」に分断し、攻撃することでいくつかの局地戦で勝利した。展示では、雪景色にカモフラージュする白い装備に身を包み、時にはスキーを履いて森の中で戦闘を行うフィンランド人兵士の写真やマネキン展示が彼らの奮闘ぶりを伝えていた。説明文としては以下の文章が印象的であった。

ロシア人兵士たちは、「白い死神」^{*12}、すなわちスキーを駆使して現れ、破壊をもたらし、再び姿を消すフィンランド人兵士を恐れていた。

*12 日本でもなぜか一部のの人に知られているシモ・ハユハ（ヘイヘ）（Simo Häyhä 1905-2002）は、冬戦争時活躍した「伝説」のフィンランド人狙撃手である。彼は「白い死神」として知られるが、この展示ではハユハの話はなく、一般的にフィンランド人兵士のことを指していると推測できる。なお、ハユハの伝記は日本語訳されている。ペトリ・サルヤネン著、古市真由美訳『白い死神』アルファポリス、2012年。



写真6
フィンランド人兵士の写真が多く展示されていた

兵士の日常の展示としては、野外での食事風景の展示が印象的であった。野戦病院の展示スペースも多くとってあり、兵士たちの置かれた苦境を物語っていた。

（3）戦争終結後のクフモの状況

戦争終結後のクフモの状況は、多くの写真とともに説明がなされていた。クフモの前線でのフィンランド側の戦傷者は最大3,100人、死者は最大1,600人、対してソ連側は戦傷者が最大1万5,000人、死者が最大1万500人という統計が展示されていた^{*13}。また、戦死者を埋葬する英雄墓地の写真が印象的であった。避難した人びとが帰還し、町が再建される様子の写真も多く展示されていた。



写真7 戦争が終わった時の写真。時間も書かれている



写真8 戦没者墓地である英雄墓地の埋葬写真

以上のように同博物館は呼称の通り、冬戦争、特にクフモ地域の当時の状況についての展示に特化されていた。また、フィンランド人兵士の奮闘ぶりについて展示がなされていたものの、筆者の想像とは異なり、フィンランド軍、あるいは

*13 なお、冬戦争全体の犠牲者は統計によって異なるが、フィンランド側の犠牲者は2万4,000人、ソ連側の犠牲者は13万1,000人にのぼる。

個々のフィンランド人兵士への過度の賛美を見出すことは難しかった。クフモの人びとが戦争に直面し、翻弄された点は何より印象に残った。

2-2 冬戦争博物館ラーテン・ポルッティ

クフモから100キロほど北にあるスオムッサルミにあるこの博物館は1992年に開館した博物館である。この地域は冬戦争の激戦地の一つである。筆者が訪問した際、多くの来館者で展示スペースが賑わっていた。同博物館は5月末から9月末までしか開館していないので、気候に恵まれた7月初旬という時期は来館者が多い時期であるかもしれない。

同博物館はクフモの冬戦争博物館より広く、野外展示もされている。同博物館の展示もクフモの冬戦争博物館と同様、冬戦争勃発によってこの地域の住民が避難する様子から始まる。1930年代後半、この地域には1万6,000人もの住民がいたと説明されていた。



写真9 博物館正面の写真 2024年7月6日
筆者撮影（以下、同様）



写真10 ソリでの避難

しかし、異なる点はいくつも見られた。主に言語表記、冬戦争の戦況の詳細な展示、世界から見た冬戦争の展示、冬戦争以外の戦争の展示である。

（1）言語表記

展示内容の説明はフィンランド語と英語の2言語表記であったが、フィンランド語のみの説明も多く見られた。別途英文のパンフレットが設置されていたかもしれないが、筆者は気づかなかった。入館した際に、冬戦争の概略を説明したビデオ上映が始まるということで鑑賞したが、ビデオは外国人観光客のために英語の字幕がつけられていた。しかし、フィンランド人観光客の数の方が多かった。

（2）冬戦争の戦況の詳細な展示および世界から見た冬戦争の展示

同博物館の展示面積は300平方メートルを超えていると公式ホームページ^{*14}に説明があるように、かなり展示スペースが広く、そのため冬戦争の戦況の詳細な展示がなされていた。



写真11
漫画のような絵の説明による Suomussalmi の戦いの展示

また、パネルやジオラマでの Suomussalmi での戦いの展示やこの戦いに参戦したフィンランド、ソ連の双方の軍人の経歴が紹介されていたのが印象的であった。



写真12 地図と軍人の紹介パネルの表紙

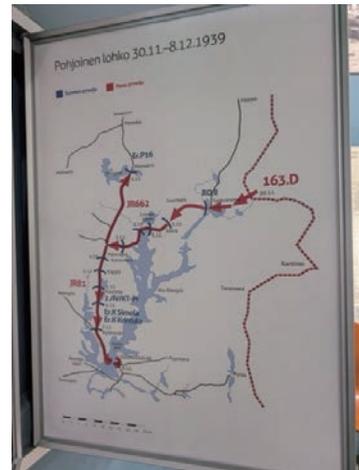


写真13 1939年11月30日から12月8日にかけてのフィンランド北部の戦況

冬戦争に関するフィンランド各地の新聞記事と外国の新聞記事を集めたコーナーも印象的であった。

*14 <https://www.raatteenportti.fi/talvisotamuseo> 2024年12月31日最終閲覧。以下 URL は同日に最終閲覧。）



写真 14
フィンランドの地方新聞
『カイヌーン・サノマット』の記事



写真 15
「世界の報道」と書かれている。写真の右上から時計回りにワシントンの『イヴニング・スター』、『タイムズ・ヘラルド』、『ニューヨーク・タイムズ』、左上はフィンランドの新聞『ウーシ・スオミ』他にも主にヨーロッパでの報道について展示がなされていた。

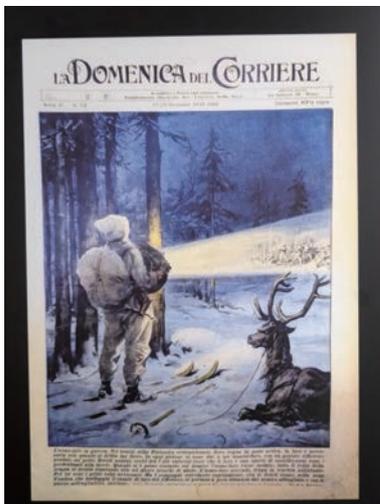


写真 16
イタリアの週刊新聞『ラ・ドメニカ・デル・コッリエーレ』 展示の説明によると、表紙の絵は胸に強力な反射板を持ったフィンランド人兵士で、それによって英雄的な死を運命づけられているとのことである。

世界がどのように冬戦争を報道したのかという展示は、筆者が見たかぎりクフモの博物館にはなかった展示である。

（3）冬戦争以外の戦争の展示

1. 継続戦争に関する展示

公式ホームページ^{*15}でも説明されているが、この博物館は継続戦争の展示も設けられており、ナチス・ドイツとの関係についての展示も見られた。フィンランドは継続戦争時、ナチス・ドイツとの軍事協力関係にあった。軍事協力に関する展示もあったが、ドイツがフィンランドで行った強制労働についての屋根付きの野外展示が印象的であった。展示の説明によると、1942-1944年にドイツ軍への補給輸送を目的に、ヒュルンサルミからクーサモまでを結ぶ鉄道が建設されたが、その鉄道建設にはロシア人戦争捕虜、ポーランド人、チェコ人、フランス人およびベルギー人の強制労働者、さらにドイツ人の懲罰収容者が動員された。さらに、補助労働力として、フィンランド人の有償労働者も参加したという。「死の鉄道」と呼ばれたこの鉄道は全長178キロに及び、さらに延長予定だった^{*16}。この鉄道は1944年1月13日に開通したが、242日後の9月にこの地から撤退するドイツ軍によって破壊されたと説明されていた。



写真17
「死の鉄道」の展示

継続戦争に関する別の展示では、1942-44年にかけて行われたソ連のパルチザンによる攻撃に関する写真展示に目をひかれた。継続戦争中、ソ連のパルチザンが両博物館があるクフモやスオムツサルミなど北の国境近くの町や村を襲撃したため、民間人の被害が多発した。展示コーナーには多くの十字架の飾りが天井からぶさらっており、その下に子どもの亡骸の写真や遺品が多く展示され、パルチザンへの「怒り」が表現されていた。

*15 <https://www.raatteenportti.fi/raatteen-portti/>

*16 附属地図を参照。



写真 18
ソ連のパルチザンの攻撃に関する展示コーナー

2. ウクライナ戦争に関する展示

筆者が訪問したとき、博物館にはウクライナ戦争の展示コーナー「ウクライナ・ナウ」が設けられていた。扉を開けると目に飛び込んできたのが銃弾の穴が空いた車で、扉の両脇には、ウクライナを支援するためのEU軍事支援ミッションに参加中と見られるフィンランド人兵士のマネキンがあった。他の展示と異なり、この展示はそれほど大きくない部屋が展示スペースとなっており、かつ扉を開けないと入れない仕組みになっていた。戦争の犠牲となった子どもの服、おもちゃ、アイコン画、ウクライナ国旗、新聞などが展示され、冬戦争、継続戦争といわば「延長」の戦争だという意図があるのではないかなと思わせる展示であった。



写真 19 ロシア軍によって攻撃された車の展示



写真 20 犠牲となったウクライナの子供服の展示

3 冬戦争記念碑と関連した慰霊碑の存在

3-1 冬戦争記念碑と散策路

冬戦争博物館ラーテン・ポルッティの外には冬戦争記念碑と広場があり、周りには7キロに及ぶ散策路がある。冬戦争の激戦地の一つであった戦闘場となった

箇所には説明文が掲載され、集団墓地や他の慰霊碑も設置されていた。

冬戦争の記念碑の説明は、英語、フィンランド語、ロシア語の3言語表記でなされており、「この記念碑は、戦争経験者と冬戦争を戦った人、その結果に苦しんだ人たち」を讃えると書かれていた。また、広場の石はスオムツサルミの戦いで亡くなったフィンランド兵とロシア人兵を表現しているという^{*17}。記念碑は、その石がある広場の上に守りの翼を広げる形状をなし、冬戦争の105日間を表す105もの真鍮のベルが取り付けられている。



写真21
冬戦争の記念碑。EU、スオムツサルミ市とカイヌー地域雇用経済開発センターの助成によって設立されたと記されていた。



写真22 記念碑の周りの風景

*17 この石は、防御石と呼ばれ、戦時中にソ連の戦車を防ぐために設置されたものに似ている。実際に、リエクサで防御石が並んでいる場所を旅行中に訪問した。ただし、実際にこれらの石が戦時に使用されたかどうかは確認できなかった。



写真 23
記念碑の奥にあったバーベキュー場

記念碑の周りに多くの石が広がっている風景は圧巻であったが、驚いたことに、この記念碑の広場の端にバーベキュー場（ソーセージを焼く場）があった。友人らは特に驚いてはいなかった。確かに、フィンランドでは国立公園や大きな公園にはソーセージを焼く場が設けられているので、フィンランド人にとっては例え戦争の記念碑の近くだろうと不思議はなかったのかもしれない^{*18}。

散策路には、ところどころ木で作られた十字架が森の間に飾られていた。また、兵士たちが寝泊まりしていたテントの跡や塹壕の跡、慰霊碑などが見られた。博物館の周りを含めた形で、冬戦争の「記憶」が保存、表象されていた。



写真 24 散策路を歩く友人たち



写真 25 戦場に立てられた木でできた十字架

3-2 「ラーテの道」沿いの戦争慰霊碑

博物館の説明では、スオムツサルミで亡くなったロシア人兵の数は、ソ連側とフィンランド側では数が大きく異なるが、フィンランド側の統計では約 1 万 3,000

*18 今回触れられなかったが、継続戦争期の戦場となったルカヤルヴィにも、ソーセージを焼くためだけの小屋が設置されており、訪問者は自由にソーセージを焼くことができた。

人から1万4,000人で、そのうちスオムツサルミを通る「ラーテの道」では7,000人から9,000人犠牲となったという。それに対して、フィンランド人兵の犠牲は約900人であった。以上のように、「ラーテの道」とはフィンランド軍がモッティ戦術を駆使して、ソ連軍をほぼ殲滅させた場として知られる。

博物館の見学後、我々もラーテの道を車で走ったが、ガソリンが残り少なく、給油ランプが点灯しながらのドライブとなったため、子どもたちが心配で涙目になっていた。私も心配だったが、「まだ大丈夫！」という友人の言葉を信じてドライブは続き、結局、終点の国境警備博物館まで訪問することになった。ガス欠になる前に最寄りの給油所にたどり着くことができたが、車内は一時期緊張状態となった。

道の途中にはさまざまな慰霊碑、記念碑、塹壕跡などがあったが、なかでも印象的だったのが、ロシア人兵士のための慰霊碑である。1994年9月に建立されたこの慰霊碑は、冬戦争中のスオムツサルミの戦いで命を落とした第44師団のロシア人兵士のために捧げられたものである。上述したように、この戦いでロシア人兵士は7,000-9,000人の犠牲が出たとされるが、ソ連側では4,674人とされており、その約半数は行方不明者とされている。いずれにせよ、多くの命が犠牲となった戦いのための慰霊碑の一つである。



写真 26

十字架を持った女性がひざまずく姿が印象的である。「祖国の息子たちへー嘆き悲しむロシア」という文言がフィンランド語とロシア語で刻まれている。ろうソクが1つ慰霊碑の前に置かれていた。

「ラーテの道」から少し離れたクフモ通りのハルキラに、2009年8月に新たに建立されたウクライナ人のための慰霊碑にも寄ることができた。この慰霊碑は上記と同じ第44師団の「ロシア人兵士」のためのものであるが、その兵士は実はウクライナ人であった。同じ戦死者をウクライナ人として慰霊したいとするウクライナ政府の意思が見出せるのではないだろうか。スオムツサルミ市のホームページによると、講和条約成立後の春に疫病の発生が懸念されたため、戦死者の遺体はソ連側に引き渡されずに集団埋葬された^{*19}。埋葬地は杭や十字架で示され、

*19 <https://visitsuomussalmi.fi/reittiarkisto/ukrainalainen-muistomerkki/>

埋葬人数も一部記録されたが、現在フィンランドの公文書館にこれらの記録は残っていないという。杭や十字架も朽ち果てたか、あるいは意図的に撤去された。撤去された理由としては、外交上の理由という説や、戦争遺物蒐集家による関心を避けるという説があるという^{*20}。詳細については今後調べたい。



写真 27

「ウクライナは死者の魂のために祈る」という文言がフィンランド語とウクライナ語で刻まれている。遺族が置いたのか、男性兵士の写真が像の脇にあった。

3-3 ユルカンコスキの冬戦争防衛基地

クフモに話が戻るが、クフモの冬戦争博物館から 11 キロほど南に下ったところのユルカンコスキに、冬戦争に関連した防衛基地があるという張り紙を見かけたので寄ってもらった。ユルカンコスキは、1939 年 12 月に大きな戦闘が行われた場所である。クフモ市のホームページによると、この防衛基地は 1995 年から 1997 年、2006 年から 2007 年にかけてクフモ市、2020 年には国防訓練センターによって改修されたとされる^{*21}。博物館として一般に無料で開放されており、クフモ予備役協会の女性部門が野外カフェを運営していた。また、同協会の会員らしき高齢者が手作りの戦況地図をもとに説明をしてくれた。



写真 28

戦況を描いた手書きの地図 2024 年 7 月 5 日筆者撮影
(以下、同様)

*20 同上。

*21 <https://visitkuhmo.fi/yritys/jyrkankosken-puolustusasema/>

敷地は広く、再現された塹壕があったり、武器の展示や、野外展示コーナーがあったり、「ロッタ博物館」と付けられた、女性国防団体ロッタ・スヴァルド（Lotta Svärd）^{*22}の展示があったりした。この博物館ではロッタ・スヴァルドに参加した地元の女性による寄贈品や写真が並べられていた。また、屋根付きの野外展示コーナーでは戦死した兵士の名前、生没年、職業、出身地、墓地の場所、軍の階級、亡くなった日が一覧表となった紙が貼ってあった。なお、この展示コーナーは冬戦争だけではなく継続戦争の様子の写真も展示されていた。



写真 29 塹壕は入って体験することができた。



写真 30 手作りの戦況の写真パネル

印象に残ったのは、ロシア人少将の持ち物であった車と戦争記念碑である。説明によると、この車はソ連軍第54師団の司令官グセフスキー少将のものである。1940年1月29日に開始されたフィンランド軍によるソ連軍への攻撃で、フィンランド軍が勝利した時の車である。いわば、「戦利品」が展示されていた。

一方、1960年に設置された戦争慰霊碑は、冬戦争中にクフモの前線で戦った第14独立大隊の一員として戦ったクフモおよびソトカモ出身の兵士たちに捧げると説明されている。プレートには「1939年12月7日ここで敵の進撃が止まった」と刻まれていた。

*22 ロッタ・スヴァルドは、1918年のフィンランドの内戦期に白衛隊側の支援組織として発足した。1921年に組織化され、戦間期にはフィンランド最大の女性奉仕団体に成長した。冬戦争時には兵站部などへの補給活動、野戦病院での看護、洗濯など家事労働を担った。ロッタたちは武器を持つことはなかったが、冬戦争、継続戦争時に女性国防団体として活躍した。継続戦争後の1944年、解散させられた。しかし、ロッタ・スヴァルドの活動を伝える財団が設立され、1996年にロッタ博物館がヘルシンキから30キロほど北にあるトゥースラに開館した。<https://lottasvard.fi/lottamuseo/>



写真 31 フォード VM 1934 年製



写真 32

戦争慰霊碑 遺族からの手紙が置かれていた。青と白のリボンはどこからの寄贈かはわからなかったが、慰霊碑にはこのようなりボンや花輪が捧げられることがしばしばある。

ここでは、クフモ予備役協会が関わっているということもあり、国を防衛してくれたフィンランド兵士を讃えると同時に彼らの犠牲を悼む展示内容であった。

おわりに

以上のように、本稿では2つの冬戦争博物館の特徴と相違点を簡潔であるが挙げた。クフモの博物館は文字通り冬戦争に特化した内容に対して、ラーテン・ポルッティの博物館は冬戦争以外に継続戦争の展示、そして特別展としてウクライナ戦争についての展示が見られた。また、両館とも通常の歴史博物館と同様、時系列順に展示が進んでいったが、その展示内容には違う点が多々見られた。クフモの博物館は、地元のクフモの人びとが置かれた困難な状況を丁寧に追っていく展示内容に対して、ラーテン・ポルッティは野外の記念碑と散策路、そこを通る「ラーテの道」に設置されている慰霊碑や戦跡を含めて、戦争の凄まじさ、フィンランド軍の奮闘を現在まで伝えている。またこの地域は観光ルートとして整備

されている点も特徴的である。

なお、2つの冬戦争博物館は冷戦終結後に開館している。また、ロシア人兵士(ウクライナ人兵士)の2つの慰霊碑も冷戦終結後に設置されている。戦争博物館は、政治情勢にも影響を受けるという当たり前のことに改めて気付かされた。

本稿に記した内容は、筆者自身の問題関心に大きく影響を受けている。現在の問題関心から筆者が目についたのは、ウクライナに関する展示や慰霊碑であったことは明らかである。一方で、筆者は武器にはあまり関心がなく、両館で展示されていた銃や戦車などにはあまり目を向けることができなかつたので、本稿では紹介していない。本稿で整理した内容は、あくまで在外研究テーマである「現代フィンランドにおける第二次世界大戦の『記憶』と社会の変容」に照らし合わせてみたものである。いずれにせよ、今回の調査では博物館の展示や慰霊碑、戦跡から多くのことを学ぶことができた。今後の研究に活かしたい。

追記 今回の調査旅行自体は私費であるが、在外研究の機会を与えてくれた国士館大学、そして快く送り出してくれた同僚に感謝したい。また、本報告は科学研究費基盤研究(B)「記憶する都市:ヨーロッパにおける場所とモノが語る「歴史」」(23K28315)の成果の一部である。

附属地図



拙著『物語 フィンランドの歴史—北欧先進国「バルト海の乙女」の800年—』中公新書、2017年、157ページの地図に加筆。